

琉球大学学術リポジトリ

琉球国王の神号と『おもろさうし』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2007-11-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池宮, 正治, Ikemiya, Masaharu メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/2396

琉球国王の神号と『おもろそびうし』

池 宮 正 治

一 『中山世譜』『球陽』の王の神号

古琉球の国王には「神号」といわれる別称がある。近世琉球の代表的な史書『中山世譜』や『球陽』には、尚豊王にいたる歴代の王の「神号」なる別称が記されている。その別称は、琉球最初の史書である『中山世鑑』によると、尚思達の場合には「世子キミテダ立給。是為中山王尚思達」とあつて、即位する前に神号を授つてゐるが、全体から見ればこれはまったくの例外である。尚円紀には「尚円、国人推シテ即位ゾ成奉ル。去程ニ其翌五月守護ノ神出現有テ、名ヲバ金丸アンヂラスエ末統ノ王ニセイトゾ付給」とあつて、守護の神が出現して神号を付けたことが見えている。おそらく王の神号というのは、後述の幾つかの例でも伺えるように、神女たちが新国王を祝福するためにおもろといつた神歌を歌いつつ所定の神女が神がかりし、天神から授かつた「神名」なるものを伝え授けるというものだったであろう。

上の「中山世鑑」は何故か肝心の尚真王紀を欠くが、その子尚清王紀には、はたして「御即位ノ翌月正月十六日、天神アフキラノカミヲリサセ給テ、御名ヲバ、天継アンヂラスエ末継ノ王ニセイトゾ付奉給」とあつて、天神が天降りして神号を授けたことを記している。同時代の「かたのはなの碑文（国王頌徳碑）」（一五四三年）にも「天より王の名をば天つぎ王にせとさづけめしよわちへ」とあつて、この短い神号と「天つぎ王にせのあんじおそひがな

し」という長い神号が見られる。

嘉靖二五（一五四六）年に建立された「新添石垣」（すゑつぎ御門の南のひのもの）にも「首里の王天つぎわうにせのあんじおそいかなし天」と「首里天つぎのあんじおそいがなし天」（文中二例）と長い神名があり、末尾に「天」が付加されたもの、それがない「首里天つぎのあんじおそいがなし」といったものが同じ碑面に見られる。つまりここにも長いフルネームタイプと短い簡略タイプの神号がとりどり見られるのである。その後の「やらざもりくすくの碑文」（一五五四年）にも「琉球国中山王尚清、天つぎわうにせのあんじおそひがなし」とあるが、おのおの微妙に異なるところがある。その後に掲げた「世鑑」と「世譜」にある尚清の神号はこれらを短くまとめたものであった。

尚元王と尚永王については当人の碑文等が見当たらないのでここでは取り上げないが、尚寧王については、「浦添城の前の碑」（一五九七年）に、尚寧王が浦添より首里へ（てだ||国王となつて）照り上がりなざつたので御名を「てだがすゑあんじおそひすゑまさるわうにせ」と付けたと書き記されている。ところがここでも「首里てだがすゑあんじおそひ天」という神号が二例記されている。正式なフルネームと略号の関係であろうか。

尚寧王が自らと父祖の墓として整備した時の記念碑「ようどれのひのもの」（一六二〇年）には「てんよりわうの御なをば、りうきう国てだがすゑあんじおそいすへまさるわうにせ」と付けたことが見えている。ここにはこれとは別に「首里てだがすゑあんじおそひかなし天」とも出ている。これらの神号を比べて見ればわかるように、「世鑑」「世譜」「球陽」に見られる神号が要約されたものであって、なかには必ずしも適當でないものもあることが分かるだろう。

もつとも新しい神号は「本覚山碑文」（一六二四年）に刻まれた尚豊王の神号「首里の王天ぎやすゑあんじおそ

いがなし」である。これを最後にその後の王にはこうした神号は付けられなくなる。これらの王の神号はその意味で古琉球的な背景を負ったものだったと言える。

「世譜」になると歴代國王の神号は次のように整理される。なお括弧内の読みは筆者が入れたものである。

舜天王	神号 尊敦(そんとん)
舜馬順熙王	神号 其益
義本王	神号不伝
英祖王	神号 英祖日子(ゑそのでたこ)
大成王	名号不伝
英慈王	名号不伝
玉城王	名号不伝
西威王	名号不伝
察度王	神号 大真物(おほまもの)
武寧王	神号 中之真物(なかのまもの)
尚思紹王	神号 君志真物(きみしまもの)
尚巴志王	神号 勢治高真物(せぢたかまもの)
尚忠王	神号不伝
尚思達王	神号 君日(きみてだ)
尚金福王	神号 君志(きみし)

尚泰久王 神号 那之志與茂伊(なのしよもい) 又は大世主(おほよのぬし)

尚徳王 神号 八幡之按司(はちまんのあぢ) 又世高王(せだかわう)

尚円王 神号 金丸按司添未統王仁子(かなまるあぢそへすゑつぎわうにせ)

尚宣威王 神号 西之世主(にしよのぬし)

尚真王 神号 於義也嘉茂慧(おぎやかもゐ)

尚清王 神号 天統之按司添(てにつぎのあぢそへ)

尚元王 神号 日始按司添(てだはじめあぢそへ)

尚永王 神号 英祖仁耶添按司添(ゑぞにやすへあぢそへ) 又日豊操王(てだほこりわう)

尚寧王 神号 日賀未按司添(てだがすへあぢそへ)

尚豊王 神号 天喜也未按司添(てにぎやすへあぢそへ)

『球陽』には上の舜馬順熙の神号「其益」を「其益美」としている。末吉安恭が南方熊楠に宛てた大正七年八月二一日付書簡によると「ソノマスミ」と読みがなが振られている。舜馬順熙の読みからきているのかも知れない。

尚永王のもう一つの神号「日豊操」は沖繩タイムス「大百科」では「テダトヨムトリ」と読んでいるが、ここでは「てだほこり」(てだぐくり)に当てたものと読んでみた。「操」の原義には「繰る」意もあるからである。「てだほこり」には日神が喜ぶ、また王が喜ぶ意がある。ただこのフレーズではおもろに出ていない。

また、朝鮮の『海東諸国記』には尚巴志の名を「意載」、尚金福の名を「金皇聖」、尚泰久の名を「真物」、尚徳を「大家」というとあるが、このことは琉球の史書にはいっさい反映されていない。今後の課題である。

二 おもろにみる王の神号

『おもろさうし』は王の神号を見るのにもっとも有効な資料である。このことはすでにいくつか示した通りで、以下に順次詳しく述べることにする。

〔英祖Ⅱ日子、英祖日子〕

英祖王の次の大成から尚思達までの国王についておもろにはまったく歌われないが、英祖だけは、「ゑぞのてだ」のかたちで出ている。「世譜」「球陽」にある神号「英祖日子」（ゑぞのてだ）こそないものの、おもろの巻十八の二七に、

一 いとかずにおわるてだ（系数におられるテダが）

ゑぞのてだ みちゑ（英祖のテダを見て）

みちまわて（満ちまわって）

又 やかぶかちあよむてだ（屋嘉部へ歩むテダが）

島尻の系数に巡遊してきた英祖のテダを人々が見て、見た人々が全身に喜びが満ち溢れて、というものである。

テダは近世に入っても国王を意味したが、この「てだ」という語は、天地を主宰する神・天帝や太陽を意味する漢語の天道（てんだう）から出てテダとなつて出回つたものである。太陽そのものも無論テダというが、靈力の根源であるテダから靈力を受ける者として、王や按司、集落のそうした人物までもテダと呼んだことが『おもろさうし』に伺える。テダセチを受けた王や按司は神女にテダ（神）として靈力を付与する立場にもあつた。

おもろ巻十八の十八、

一 ゑぞのいくさもい（英祖のイクサ（人名）もい（接尾敬称））

月のかずあすびたち（毎月神遊びを催し）

とももと わかてだ はやせ（十百年（千年）若日をたたえよ）

又 いぢへきいくさもい（優れたイクサ思いは）

又 なつはしげちもる（夏には神酒を盛る）

又 ふよは御さけもる（冬にも御酒を盛る）

おもろに謳われたこのおもろが英祖のものとすると、イクサが英祖の名ということになる。英祖は地名で、当時は姓がないのでイクサが名前である。このイクサの名は、例えば尚清の三司官の二人が「真伊久佐」「真栄久佐」と出ており（「真」は接頭語、他はイクサの異表記）、これは近世まで童名として残っていた。一七〇年『おもろさうし』を再編したときに、おもろ主取の安仁屋家に伝来したいわゆる安仁屋本の原注にも、これに注して「恵祖てだの幼少の御名なり」とある。ただし史書は英祖の童名を伝えていない。

〔尚金福Ⅱ君志〕

史書の記載する神号に従えば尚金福の神号は「君志」である。「きみし」はおもろの巻十五の二七に、

一 きみしあぢおそいや（君志按司襲い（尚金福王）は）

わしどふさよわる（驚こそ相応しい）

かみ下 世 そわて ちよわれ（北南の沖繩島を統治しませ）

又 うまみちやも わしげ（馬御駄Ⅱ馬も驚毛）

わしど ふさよわる（驚こそ相応しい）

又 のりみちやも わしげ（乗り馬も驚毛）

わしどぶさよわる（驚こそ相応しい）

おもろの十三の一四三に「きみし」とあるほか、五の三九、十五の五六に「きみしてだ」、十四の四に「きみしたたり」、十五の二七に「きみしあぢおそい」とある。「きみし」のつく神号には、尚思紹に付けた「君志真物」もある。

〔尚泰久Ⅱ那之志与茂伊、大世主〕

「大世主」については、おもろの巻五の二二のおもろに「大世のぬしあんじおそい」の形で次のように出ている。

一 くにかさがもちよる（国笠神女の靈力）

大世のぬしあんじおそい（大世の主按司襲い〔尚泰久〕が）

とももすゑ（いついつまでも）

そろゑて ちよわれ（国を治めてまします）

又 くもこもりおやのろ（雲子森の御ノロ）

又 しよりもり おれて（首里森に天降りして）

又 またまもり おれて（真玉森に天降りして）

又 てるかはは たかべて（照る日を祈って）

又 てるしのは たかべて（照る陽を祈って）

又 きみぎみは たかべて（君々〔神女〕を祈って）

尚泰久のもう一つの神号である「那之志与茂伊」については、おもろその他に使われた形跡がないばかりか、こ

れまで目ぼしい提案もみらない。苦し紛れに「那」を「邦」の誤字と見て「邦之志与茂伊」とし「邦の主思い」と解しては如何か。「邦の主」はつまり「世の主」と同じく国王の別称と考えられなくもない。「大世主」のほうは、尚泰久が幕府に「代主」（世主）と書いた書簡をだしていること、銅銭「大世通宝」もこの頃の貨幣と言われている（東恩納寛惇『南島通貨志の研究』）ことなど若干の根拠はある。

〔尚徳Ⅱ世高〕

尚徳の神号は世鑑には「八幡王子」「世高王」、「球陽」に「八幡之按司」「世高王」とある。ただこれを裏づける明快な傍証資料はこれまでのところない。ただしおもろにはそれらしいものが一例だけある。

卷十二の二四（五の十四）に、

一 しよりまだまもり（首里真玉森）

せだかあんじおそいや（世高按司製いは）

きみよせ きらくせ みもん（君寄せ 綺羅奇せ みごと）

又 きみのもちづきや（君の望月は（おもろを謡い））

せだかあんじおそいや（世高按司按司製いは）

とある。

ここの「せだか」は精、靈力が高い、強いというほめことばで、せだかこという有名な神女もいる。多くはこのように神女について神女の靈能の高さを賛美するいわば定冠詞であるが、これも類似のほめことばと受け留めてよいであろう。「あんじおそい」また「あちおそい」は、もともと各地の按司を支配する意で、王を指すことばとしても使われている。したがって、「世譜」「球陽」の神号「世高王」に根拠があるとすれば、右のおもろの「せだか

按司おそい」を尚徳と理解してもよいように思われるのだが、近世の諸史書に見られるということ以外確かな根拠は見出されていない。この時代の銅銭といわれる「世高通宝」も尚徳の神号を裏付ける根拠の一つになるかも知れない（東恩納寛惇前掲書）。

〔尚円〓金丸按司、末統の王二世〕

神号は「世鑑」に、即位の翌月の五月、守護の神が出現して「金丸アンヂラスエ末統ノ王ニセイ」と名付けたとある。そしてこの神号は「世譜」には「金丸按司添末統之王仁子」と漢字があたる。表記は若干違うが内容はまったく同じである。

おもしろには「かねまる」の例が数例あるが「かなまる」の例はない。その「かねまる」も大方神女名で、まして「世鑑」「世譜」所載の神号に直接該当しそうなものは左の一例のほか見当たらない。卷十四の四五に、

一 きこゑかねまるが（聞こえ金丸が）

おもひぐわのきみのあすべば（思ひ子の君が神遊びすると）

みばしや しようちへ（王が）見たがりたまいて）

又 とよむかねまるが（鳴響む金丸が）

おなりがみのあすべば（姉妹神が神遊びすると）

ここの「かねまる」は金丸であるう。「君」が身分の高い神女をいうことからすると、ここの「思ひ子」は尚真の姉妹神（をなりがみ）である初代開得大君・音智殿茂金（おとちとのもかね）であろうか。

史書にある神号の末尾「王ニセイ」（世鑑）と「王仁子」（世譜）は、讀え言葉の末尾で、おもしろに「わうにせ」のかたちで多出している。詳しい説明をいまだ見ないが、表記を尊重すれば「王二世」と解される。二世とは現世

と来世にまたがつて王の位を継ぐようにとの願いを込めた王に対する讃えことばであろう。もとは仏教語である。「とももと」（十百年〓千年）や「やちよ」（八千代）といった王の長久を願うことばもおもろには多い。「にせ」もそうしたことばの一つと思われる。

〔尚真〓於喜也加茂慧〕

尚真の神号「於喜也加茂慧」はおもろに頻出する「おぎやかもい」を写したものである。同時代の「国王頌徳碑（石門之東之碑文）」（一五二二年）に「首里おぎやかもいがなし」、「かなひやぶの御嶽」の額に「首里の王おぎやかもいがなし」とあつて裏付けられる。また「真珠湊碑文」（一五二二年）にも「首里の王おぎやかもいがなし天」とあつて、尚真であることは動かない。

詞書のあるおもろでは、卷十三の十七に、

正徳十二年十一月廿五日ひのとのとりへの（一五一七年十一月二五日丁の酉の日に）

せぢあらとみ、まなんばんに御つかい（勢治荒富、真南蛮に御使い）

めされし時に、おぎやかもい天の（召されし時に、オギヤカモイ天の）

御みてづからめされ候ゑと（御み手づから召され候ゑと）

一 大きみはたかべて（大君神女を崇め祈つて）

せぢあらとみ おしうけて（官船勢治荒富を押し浮けて）

大きみに（大君神女に）

おゑちへこうて はりやせ（追い手風〓順風を請うて走らせよ）

又 せだかこはたかべて（精高子神女を崇めて）

又 あぢおそいぎやおさうせや（按司襲い王の御左右せ〓御手配は）

むかうかたしなて（向かう方に調和して）

又 あぢおそいが御さうせや（按司襲いの御左右せ〓御手配は）

むかうかたしなて（向かう方に適合して）

又 あぢおそいぎやおやおうね（按司襲い王の御船を）

おしうけかずまぶりよわ（押し浮けるたびに守りたまえ）

又 げらへせぢあらとみ（立派な勢治荒富を）

くりうけかず まぶりよは（繰り浮けるたびに守りたまえ）

又 ぶれしまのかみがみ（群れ島の神々）

あよそろて まぶりよは（心揃えて守りたまえ）

又 きみはへはたかべて（久米島の君南風神女を崇め祈って）

せぢあらとみ おしうけて（勢治荒富を押し浮けて）

又 のろのろはたかべて（ノロたちを崇め祈って）

ここの官船勢治荒富は真南蛮つまりシヤム現在のタイへ向かう船である。真南蛮はシヤムをさすおもろ語である。おもろには尚真を意味する「おぎやかもい」が五〇例余り、「おぎやかもいあぢおそい」や「おぎやかもいがなし」が十例余りともっと多く出ている。その意味で『おもろさうし』は尚真をたたえるおもろで満ち満ちているといえる。ところが上の詞書にある神号「おぎやかもい天」はおもろ歌謡のことばとしては一例も出ていない。「天」は接尾敬称辞として付加されたもので、「あぢおそい天」などのようなかたちで他の王の神号にも使われる。

卷五には例えばつぎのようなおもろ群がある。卷五の六五番、

一 おぎやかへどもいや (おぎやかへど思いは)

しよりおやぐに おてからわ (首里御国に居るからには)

とももすゑ (十百末||いつまでも)

あまゑよすならめ (歎え世にこそなるだろ)

又 おぎやかしひつぎが (おぎやか精継ぎが)

わがおやぐに おてからは (我が御国に居るからには)

卷五の六六番歌に

一 おぎやかへどもいや (おぎやかへど思いは)

おぎやかしひつぎや (おぎやか精継ぎは)

ももあちの みあくもてだ (百按司が見たがるテダ)

又 しよりもり ちよわる (首里森にまします)

おぎやかもいかなし (オギヤカモイ加那志||尚真様)

卷五の六七番に

一 おぎやかへどもいや (おぎやかへど思いは)

おぎやかしひつぎや (おぎやか精継ぎは)

とももすゑ (十百末までも)

これどいちへ とよま (これをこそ言つて鳴響もう)

又 しよりおわる（首里におられる）

くすくおわるてだこ（お城におられる日子）

この一連のおもろに首里森や首里城におられるとあることから「おぎやかへどもい」「おぎやかしひつき」も「おぎやかもい」と同じ内容で、尚真を意味する「おぎやか」であることが推し量られる。そのうち「へど」は童名とみられるが、史書には尚真の童名を「真加戸樽金」としている。これは「たまおどんのひのもん」（一五〇一年）に「首里おぎやかもひがなしまあかとだる」とあるのと符合する。

「おぎやかもい」の「きやか」は「かが」とも縁をひく「かが」から変化したものである。「かが」は光や影、姿を意味し、現在影を意味する琉球語の「カーガー」とも縁を引くものである。その動詞化した「きやがる・ひ」（輝く日＝吉日）の表現がもつとも多く、もともとは靈力の根源である太陽つまり太陽盃の光り輝くイメージである。尚真の神号「おぎやかもい」は、接頭語と接尾語を除けば、輝く意の語幹「きやか」が残り、これが光り輝く太陽王尚真の尊称となったのである。

〔尚清＝天統之按司〕

那覇川河口南岸を整備した時の記念碑「やらざもりくすくの碑文」（一五五四年）には、聞得大君以下の神女達が参加してミセセルを唱えて祝福しようすが記されている。この時歌われたミセセルを官僚達がおもろに改作したものが『おもろさうし』に収められている。『おもろさうし』巻十三の十八にある詞書とおもろ、

嘉靖三十二年五月四日つちのとのとり（嘉靖三十二年五月四日己酉の酉の日に）、

やらざもりのまうはらいの時に、きみ（屋良座森の毛払い＝竣工式の時に君）

真物のみ御まへよりおがみ申ませせる（真物＝神女の御前よりいただいたみせせる）

天つぎのあんじおそいがなし天の（天継ぎの按司襲い加那志天尚清王の御み事に、ゑとつくり申候（ご命令でゑとを作りました）。

やふその大やくもい（屋富祖の大屋子思い）

ごゑくの大やくもい（越来の大屋子思い）

こふばの大やくもい（久場の大屋子思い）

くによしの大やくもい（国吉の大屋子思い）

一 天つぎの御さうせ（天継ぎ尚清王の御左右せ（ご企画）で）

大きみはたかべて（大君神女を崇めて）

やらざもり いしらごは おりあげて（屋良座森に石垣を織り上げて）

とももすへ せいいくさ よせるまじ（十百（千年）末まで勢軍（外敵）を寄せるまい）

又 わうにせの御このみ（王二世の御好み注文で）

せだかこはのだてて（せ（靈力）高い子神女に祈りたてて）

やへざもり ましらごは つみあげて（八重座森に真白石を積み上げて）

とももすへ（十百末）

又 きこゑ天つぎの（聞こゑ天継ぎ（尚清）が）

世のさうせ めしよわちへ（世の左右せ手配りをなされて）

おくのみよう いしらごは おりあげて（沖の滯に石垣を積み上げて）

とももすへ（十百末まで）

又 とよむわうにせの (鳴響む王二世が)

世のさうせ めしよわちへ (世の左右せ Ⅱ 計画をなされて)

おくのうみの ましらごは つみあげて (沖の海に真石垣を積み上げて)

とももすへ (十百末まで)

又 きこへ大きみぎや (聞得大君が)

やらざもり ちよわちへ (屋良座森に來られて)

だしきやくぎ さしよわちへ (聖なる) だしきや木の釘を (地に) 差したまい)

とももすゑ (十百末)

又 とよむせだかこが (鳴響む精高子神女が)

やへざもり ちよわちへ (屋良座森に來られて)

あざかがね とどめは (あざか (聖木) を打ち止めたからには)

とももすへ (十百末)

前詞「天つぎのあんじおそいがなし天」に安仁屋本原注は「尚清王がなし神御名也」とあり、またおもしろの「天つぎ」にも「王がなし世」とある。それに「一」の「天つぎ」と第一「又」の「わうにせ」、第二「又」の「きこゑ天つぎ」と第三「又」の「とよむわうにせ」はそれぞれ尚清王の神号「てにつぎのわうにせ」を二分して塩梅してある。ほかに十二例「天つぎ」「おうにせ」の例がある。史書にある「天統之按司」に類するものはなぜか一例も見出せない。それでは史書の「天統之按司」は何によつてゐるのか。おそらく上に紹介した「かたのはなの碑文」(國王頌徳碑)にみえる「天つぎ王にせのあんじおそひがなし」や「新添石垣」(添継御門の南のひのもん)(一五

四六年)に見える「首里の王天つぎ王にせのあんじおそいがなし天」「首里天つぎのあんじおそいかなし天」(二例)「首里天つぎのあんじおそいかなし」といった尊号を簡略したものだろう。とにかくおもろには右に述べたとおりであつて、史書に見える神号そのままに合致適合するものはみあたらないが、そのもとなつた相応する神号は多い。

〔尚元〓日始〕

尚元王の神号「日始按司添」(てだはじめあんじおそい)というのは、碑文やおもろにも見られない。したがつて「日始按司添」の神号が確実に使用されたものかどうか、これまでのところ確認できない。尚元は一五五六年に父王尚清の後を受けて即位、一五七二年まで十七年間在位している。短くもない治世であつて、むろんおもろに反映してよいはずである。

詞書のあるおもろのうち卷十二の四三、四四(いずれも嘉靖二四年)、同八一、八二番(いずれも嘉靖二八年)の年号に、安仁屋本系統の写本にはおのおの「尚元王御世」「尚元王御代」と注が見られるが、年号からはこれらのおもろはいずれも父王尚清の時代のものであつて、一七一〇年の再編のさい安仁屋本『おもろさうし』に誤つて付けられた注書きであることが分かる。結局神号「日始」(てだはじめ)を裏付けるものは目下のところない。

〔尚永〓英祖仁耶添、日豊操〕と〔尚寧〓日賀未按司添〕

尚永王の神号「英祖仁耶添」は「ゑぞにやすゑ」を写したもので問題はないが、「日豊操」については沖繩タイムス社の『沖繩大百科』に「てだとよむとり」と読んでいる例があるだけである。参考までに私案を述べれば論者はこれを「てだほこり」と読んでみたい。おもろにも「てだほこり」の例はないが、「あちほこり」「かみほこり」「きみほこり」など尊敬すべき対象に「ほこり」が付いた同様の語形の例は多い。日神つまり国王が喜ぶ意である。

「ただほこり」は他に見られないと述べたが、これに対してもう一つの「英祖仁耶添」のほうはおもろに実に多く出ている。巻三の三のおもろ。

一 きこゑせのきみぎや（聞こえ精の君が）

すゑとめて おれわちへ（精を求めて降りたまいて）

いみやからど（今からこそ）

おれなおちへ あすぶ（降り直して神遊びする）

又 とよむくにとよみ（鳴響む国鳴響み神女が）

ませねがて おれわちへ（真精を願つて降りたまいて）

いみやからど（今からぞ）

又 首里もり ちよわる（首里森にまします）

ゑぞにやすゑあぢおそい（英祖仁耶末按司襲い尚永王のために）

いみやからど（今からこそ）

又 とし七と（年の七年）

おぼつたけ おき（や）つめ（天上のオボツ嶽の神々の加護で）

いみやからど（今からこそ）

又 ゑか八とせ（吉日の八年）

しよりもり まどおさ（首里森での祭りが間違しと）

いみやからど（今からこそ）

又 てるかはがうざし（照る日「日神」の御差し「ご命令」で）

さしぶ おれなおちへ（差し者＝憑依者によりついで）

いみやからど（今がらこそ）

おれなおちへ あすぶ（天降りし直して神遊びする）

巻四の五九と六の六と十二の八八のおもろは重複関係にあり、前詞によつていずれも尚永王代の万曆十五年十月十八日の、王権強化を目的にした「君手擦りの百果報」という恒例の祭事の時のおもろであることがわかる。ところがこのおもろには尚永の神号が見当たらない。同様に前書に王の名があつても、おもろに尚永王の神号の見られないものが、万曆六年十月十五日と同十九日の「君手擦りの百果報」祭りの時のおもろ（巻十二の八四、八七、八八）にも見られる。

卷五の三〇、

一 あまみきよわ（創世神アマミキヨは）

大しまはつくて やちよ（大島＝沖繩島を作つて 八千代）

ゑぞにやすゑ（英祖仁屋の末なる）

おぎやかもいに（オギヤカモイに）

みおやせ（奉れ）

又 しねりやこは（シネリヤコは）

大しまは（大島を）

ここの「ゑぞにやすゑ」は、尚真の神号としても使われているものでもあるが、「おぎやかもい」はセテ靈力で

輝いている御方の義で、普通名詞的な固有名詞である。したがっておもろには「おぎやか」の付く例は多い。尚真の母親も「おぎやか」である。「ゑぞにやすゑ」は上に訳したように「英祖仁屋末なる」と尚永の神号を修飾したものである。

もう一つ興味深いのは、尚永と尚寧の二つの神号を取り込んだ一群のおもろが存在することである。

卷三の一〇のおもろ、

一 ぢ天とよむ大ぬし (天地に輝く大主 〓 太陽からの)

にるやせぢ しらたる (ニルヤからの靈力で知られた)

せぢや (り) やり (靈力を遣りに遣り)

やまとしま ひぢめ (大和島を苛めよ)

(又) だしまとよむわかぬし (大島に輝く若主 〓 太陽)

かなやせぢ しらたる (カナヤからの靈力で知られた)

又 しよりもり ちよわる (首里森にまします)

ゑぞにやすへあぢおそい (英祖仁屋末按司襲い 〓 尚永王)

又 まだまもり ちよわる (真玉森におられる)

てだがすへあぢおそい (太陽の末按司襲い 〓 尚寧王)

又 せこさ たてらかず (勢軍を派遣するたびに)

うちやりやり とよめ (討ちに討つて鳴響め)

又 せひやこ たてらかず (勢百 派遣するたびに)

- しまより まさよわれ (島の踊りはまさりたまえ)
又 げらへ大ごろた (立派な丈夫たち)
又 きりさへもつけるな (霧・鏑も付けるな)
かうさびもつけるな (粉鏑も付けるな)
又 ははらおしたて (原々 || 兵士達を押し立てて)
はやめよくちにとめれ (流れの速い水路の口に止めよ)
又 まさけなよ ぬきやげて (真酒菜を差し上げて)
あうやかたも さ(さ)げ (青屋形も捧げて)
又 けやるよよすとみ (気ある世寄せ富 || 船を)
おしうけかず みまぶら (押し浮けるたびに守ろう)
又 せいやるおきめづら (精ある浮き珍ら || 船を)
くりうけかず みまぶら (繰り浮けるたびに見守ろう)
又 やまとまへぼじやの (大和の真武士を)
あよなめのいつこ (心中悔る敵子 || 兵士)
又 やしるまへぼじやの (山代の真武士を)
ことなめのおがつぎや (殊舐めのお前ら衆生)
又 せくさてて たてば (勢軍といつて出立させると)
ひせとあわちへ ついのけ (船を) 干瀬にぶつけて退けて

又 ゑそこててたてば（良底Ⅱ船といつて発てると）

にるやそこついのけ（ニルヤの底まで退け）

又 きもがうちにおもわば（心の内に思えば）

きもだりよしめれ（心をだれさせて）

又 きもがうちにおもわば（心のうちに思えば）

だいちにおとちへすてれ（大地に落として捨てよ）

又 天が下 くにかず（天下の国のすべて）

大ぬしすよしらめ（大主Ⅱ國王こそ統治せよ）

島津侵入前の緊張を伝えるかのようなおもろで、大和の軍勢に対する呪詛の声が聞こえるようである。尚永の神号である「ゑぞにやすへあぢおそい」と、尚寧の神号である「てだがすへあぢおそい」がそれぞれ対句の形で並べられ謳われている。おもしろの対句や対語というのは、或ることはや句の言い換えが主であつて、二人の異なる王の名を対語対句のように並べる例は他にまったくなく、尚永尚寧のこの例は異例である。ところが尚永と尚寧の神号の併置に関してはこの他にも、一の四〇、四の五五、五の四五、六の二、九の十五、二〇の四五などにもみられる。この二王を対句とする例をどう考えればよいのか。つまり二王を並び立てて讃歌を捧げているのである。

尚寧の王妃は尚永王の王女で、尚永はつまり義父にあたる。義父といつても尚寧よりわずかに五才年上でしかないので、兄弟のような近い関係でもあつたのだろうか。また尚永が三十才で早死したことを顧慮すれば、あるいは病弱でもあり、早くから王世子と目された尚寧が早々に実質君臨していたとも考えられる。それ故尚永の在世中に尚寧と対句のように並べて讃えられるようになったというのであろうか。尚永の神号「ゑぞにやすゑ」も尚永が

浦添出身の王であることを宣言した神号であるとも理解されよう。王権が「嫡流」である浦添王家に回帰したといふ想念があつたのではないかとも思われるところである。

尚寧王代の万暦三五（二六〇七）年十月十日の君手擦りの百果報祭祀の前書があるおもしろ（巻四の五八〜六〇Ⅱ巻六の五〜七）があるが、その詞書にもおもしろにも尚寧の神号は認められない。おもしろに尚寧の神号がなくても詞書で尚寧の祭祀であることが明らかになる。巻十二の場合は、八八に詞書があつて、上と同じく尚寧の万暦三五年十月十日の君手擦りの百果報の時のおもしろが記されている。第一首には神号はないが、二首目には次のように王の神号を入れている。三首目にもみられるが省略する。

十二の九〇、

一 大きみぎやまぶる（大君が守る）

てだがすへあちおそい（太陽の精を受けた按司襲い〔尚寧〕）

天ぎや下（天の下に）

すへまさてちよわれ（精まさつてましませ）

又 せだかこがみまぶる（精高子が見守る）

すへまさるわうにせ（精勝る王二世）

又 おぎもうちの おさうせや（お心内のお左右せは）

あけどまに たとへて（明ける前に譬えて）

又 あよがうちのおさうせや（心の内のお左右せは）

あけだちにたとへて（明け立ちに譬えて）

又 きみぎや世ねんげらへて (君が世稔〔豊稔〕を実現して)

ぬしぎや世ねんげらへて (主の世稔〔豊稔〕を実現して)

又 くもこはし かけわちへ (雲子橋を架けたまいて)

みものはし かけわちへ (見物橋を架けたまいて)

又 うらおそいに ちよわちへ (浦添に来たまいて)

世のつぢにちよわちへ (世の辻にきたまいて)

又 いへのいのり めしよわちへ (忌部の祈りをなしたまいて)

つかさいのり めしよわちへ (司祈りをなしたまいて)

又 つかさかず ほこりよわちへ (全ての司が喜びたまいて)

あぬしかず ほこりよわちへ (全ての吾主がほこり給いて)

又 てるかはむ ほこりよわちへ (照る日〔王〕も喜びたまいて)

いぢろこむ ほこりよわちへ (い出る〓優れた子〔王〕も喜びたまいて)

これより前尚寧は尚永の後を継いで浦添按司から首里のテタに迎えられる。その記念碑である「浦添城の前の碑」〔首里天のみ御み事に たいへいけう たいらはしつみ申時のひのもの〕(二五九七年)に「しやうねいは、そんとんよりこのかた、二十四代のわうの御くらるをつぎめしよわちへ」〔てんよりわうの御なをばてだがすゑあんじおそひすゑまさるわうにせ〕と神号を付けられたことが記されている。この神号は上のおもろでは史書にある「てだがすへあぢおそい」と「すへまさるわうにせ」が、節を分けて対句として出されている。さらに次のおもろ(十二の九一)にも一節の中の対句で「又 てだがすへあぢおそい／すへまさるわうにせ」とある。史書はこの対語の

「すへまざるわうにせ」を伝えていない。史書には扱われていないがこれもまた尚寧の紛れもない神号として当時使われていたことは見たとおりである。右の碑文は尚寧が国王になったために首里と浦添の往来の利便をはかるべく太平橋Ⅱたいらばしを架橋し、道に石を嵌めて整備したことを記念したもので、上のおもろに、「くもこはしかけわちへ（雲子橋を架けたまいて）みものししかけわちへ（見物橋を架けたまいて）」とあるのはそれである。

尚寧は死のまぎわに浦添の極楽山（ようどれ）墓を整備し、これを記念して建てた「極楽山之碑文」（二六二〇年）に「此山者琉球国四代之世主、英祖之天子之開基也」とあつて、尚永の神号と同様「ゑぞにやすゑ」であるために、王の先祖一氏一族を浦添城の「極楽山陵」に納めるのだとある。この裏には尚寧の側に尚王家の正系意識があつたのではないかと思われる。浦添尚家は尚真の長子尚維衡浦添王子の末裔で、尚真の第一子でありながら「たもおどんの碑」で玉陵への入墓を拒まれている。それに尚永の母親は真和志の聞得大君といい、広徳寺浦添親方の孫娘であるが、そのため尚永にも浦添への帰属意識があつたとも考えられる。

その前尚元王の即位にあつて勢力を二分する抗争があつた。結果尚清の三司官の二人が遠流となつている。後に許されたが、その一人が広徳寺浦添親方で、孫娘が尚元の妃になつている。この二人の間に生まれたのが尚永である。そして尚永が死すると娘婿の尚寧に政権が回つてきた。当時首里に尚豊の父尚久を始め、尚清の王子、尚元の兄弟だけでも八人国王資格者が居り、その子孫の中からも適当な人材があつたのではないかと思われるのだが、結局尚寧に回つたのには、尚永と尚寧が義兄弟で強い結びつきがあつたことその他に、「ゑぞにやすゑ」といつた浦添回歸があつたのではないかと推測される。平仮名碑文の「ようどれのひのもん」には「りうきう国てだがすゑあんじおそいすへまざる王にせがなし（尚寧）は、うらおそいよりしよりにてりあがりめしよわちやこと」（琉球国尚寧王は浦添から首里に照り上がりなされたので）墓を整備し祖父・父の遺骨を移徙し、自らもそこに納まるべく

造営したことが記されている。尚永の神号「ゑぞにやすゑ」が浦添に強くこだわった神号だったことを伺わせる。

『おもろさうし』に尚永と尚寧の神号が対句の形でしばしば使われていること、おもろにおける王の神号が、尚真を除けば、この二人が圧倒的に多く出ていることを考えると、おもろの収集と編纂もまたこの二人の、もつと端的に言えば尚寧の号令で、全琉球規模の編纂作業が進められたのではないだろうか。尚真が古琉球にあつても近世にあつても、第二尚氏王統の絶頂期に君臨した赫々たる王の象徴として敬慕されていたことは間違いない、おもろは尚真への讃歌で満ち満ちている。しかし古琉球の終焉間近くなってこの二王のおもろが頻出するのは、『おもろさうし』の天啓三（一六二三）年成立以前に、すでに実質尚永・尚寧期に事業が進められていたことを伺わせるものでもある。沖縄と同じくおもろの伝承地域であつた奄美のおもろ三〇余首が、地方おもろではなく、外洋航路のおもろを集めた卷十三の「船ゑとのおもろ」に収められているのは、薩摩進入後の奄美の割譲という現実を反映したものと思われる。今後尚永・尚寧王権とおもろの編纂について、おもろがかいま見せた角度からも検討する必要が生じてくるのではないか。

卷十三の一四七（九の三九）のおもろには「先王尚寧尊君御上国之時をなぢやらの美御前御つくり被召候おもろ」とあつて、

一 まにしが まねし ふけば（真北の風がたびたび吹くと）

あんじおそいでだの（按司襲いテダ⇨尚寧の）

おうねどまちよる（お婦りの）御船をぞ待つ）

又 おゑちへと おゑちへと ふけば（追い手風（順風）が追い手風（順風）となつて吹くと）

というおもろがある。上の「先王尚寧云々」の詞は安仁屋本系統の写本にあるもので、従つて一七〇九年の再編時

に付けられたもので、この時点での伝承あるいは認識を示していることになる。詞書の意味は、先の国王尚寧が薩摩で捕われの身となっていた時、女按司（王妃）が夫である尚寧王を忍んで作られたおもしろである、というものである。おもしろにはこの「あんじおそいてだ」は「あんじおそいてだ」と「あぢおそいてだ」の形でそれぞれ数例づつ出回っている。そのうち、卷十八の二八（二七の七二）と十八の二九（二七の七三）の「あんじおそいてだ」は、対語が「いとかずのだよ」となっていて、尚寧でない。この他の「あんじおそいてだ」「あぢおそいてだ」については、尚寧の神号である可能性を含めて、今後考察する必要がある。

王の神号は確かに固有名詞であるが、それぞれありふれた普通名詞を組み合わせたもので、特に固有の名辞というものではない。ここの「あんじおそいてだ」もそうしたもので、尚寧の神号「てだがすゑあんじおそい」から下の「あんじおそい」と王を意味する「てだ」を組み合わせたもので、史書に見る上の神号とは別に、上の詞書にあるものも尚寧の神号とうけとめることもできる。おもしろとはあまり接触がなかったと考えられる琉歌にも、尚寧王妃の歌として、このおもしろを琉歌に改作したとおぼしき歌がある。

真にしの真にし吹きつめてをれば 按司添前てだのお船ど待ちよる

〔尚豊 天喜也未按司添〕

尚寧のあとを継いだ尚豊にも古琉球らしい「首里の王天ぎやすゑあんじおそいかなし」という神号があったことが「本覚山碑文」（一六二四年）に見られる。これは世譜・球陽にある尚豊の神号「天喜也未按司添」と同じで、尚寧の死後間もなくこの神号の名付けの儀礼があつて付けられたものと思われる。しかしながらもはや神女たちには、おもしろに神号を歌い込み盛大に即位の神遊びをするだけの力はなかつたのだらう。『おもしろさうし』にも尚豊を頌つたとおぼしきおもしろは一首も採られていない。尚豊は古琉球的な神号を持つた最後の王として出発するもの

の、近世に身をおいた最初の王であった。

主要参考文献

東恩納寛惇 『琉球人名考』 炉辺叢書 一九二五年 郷土出版社

外間守善・西郷信綱 『おもろさうし』 日本思想大系18 一九七二年 岩波書店

おもろ研究会 『おもろさうし精華抄』 一九八七年 ひるぎ社

外間守善 『おもろさうし』 上下 岩波文庫 二〇〇〇年 岩波書店